100th ANNIVERSARY 2007

東北大学百年史編纂室ニュース

第12号 2006.7.1

TOHOKU UNIVERSITY

●点描・百年史
敗戦前後の東北帝国大学
——女子学生の3年間より——
原田　夏子 ―――― 2

花より花に蜜をすう
—東北大学勧学会成瀬寮始末記—
遠藤　好英 ―――― 5

＊　＊　＊

百年史編纂室日誌抄録・編集後記 ―――― 8

表紙写真解説

東北帝国大学本部

昭和10年（1935）頃の写真とみられる。『東北帝国大学一覧』（昭和11年）の建物配置図によると、庶務課・会計課・学生課・営繕課が入っていた。

この建物はその後も片平地区の事務局庁舎として使用され、現在は本部別館となっている。

（東北大学史料館所蔵）

点描・百年史

敗戦前後の東北帝国大学

── 一女子学生の３年間より ──

昭和21年９月法文学部卒業（国文学）
原田　夏子

はじめに

東北帝国大学を卒業して、今年はちょうど60年。学生であった時代は遙かとなった。記憶もまことに儚く朧にかすんでしまったものの、常ならぬ３年間を送ったために、なお忘れられず頭にのこり、心に刻みつけられている事も多く、折に触れて思い出されてくる。

まず法文学部在学３年間（旧制は３年）の主なる事項を掲げる。

①入 学 式　昭和18年10月１日。法文学部357名。うち女子は文科に９名（他学部なし）。
②学徒出陣　入隊は同年12月１日（海軍10日）。
③学徒動員　19年６月より居残りの３年生が陸軍造兵廠仙台製造所へ。
　　20年１月より２年生も同じく陸軍造兵廠へ。１年生は群馬県中島飛行機伊勢崎工場へ。
④仙台空襲　20年７月10日の早暁、米B29爆撃機120余機（市の記録）来襲。
⑤日本敗戦　20年８月15日。
⑥卒 業 式　21年９月26日。法文学部251名。文科29名（うち女子９名）。

改めてこう並べて見ると、かつて例のない重大時期に大学生であったことを、今更のように思わざるを得ない。そしてよくこの時期を生き延びられたということも。

１．入学より敗戦まで

杜の都、日本のアルトハイデルベルグと憧れていた仙台の大学で、高名な先生方について学べるうれしさは、上野からの東北本線が急行で９時間もかかることなど全く気にならなかった。けれど太平洋戦争も２月に日本軍のガダルカナル撤退、５月にアッツ島守備隊玉砕、９月には同盟国のイタリアが連合国側に無条件降伏するという悲報つづきで、戦局は悪化の一途を辿っていた。

仙台駅で下りると生憎の豪雨、駅前広場にたむろしていた人力車を頼み、柳行李１つを膝に北へ向かい、外記丁の下宿に到着、東に円窓のある四畳半に落着いた。入試合格のあと国文３年の青木生子さんのお世話により、きめておいたもの。下宿代は３食付き45円。

日本女子大の同窓会宮城支部に表敬訪問に行った私は、東北帝大の先輩でもある山口日米代（13年卒、英文）支部長から思いがけない厳しい注意を受けた。それは思想問題と恋愛問題を決しておこさぬことと。いささか浮き浮きしていた私の心を引きしめようとの配慮だったかもしれない。やがて、経済科の女子学生が特高（とっこう）（思想言論を取締まる特別高等警察）により検挙されていることを知った。

戦争状況が極端に深刻になる中で、ついに在学徴兵猶予全面停止となり、文系学生は卒業を待たずに戦場へ行くことになった。いわゆる学徒出陣である。10月８日学内での壮行式、11月18日には文部省主催出陣学徒の野外演習と壮行式が宮城野練兵場で挙行された。来仙した文部大臣岡部長景の壮行の辞も上の空、寒さと何ともいえぬ怖れと不安とで震えながら佇んでいた。意気揚るどころではなかった。

この時期、出陣の学生から頼まれては日の丸の旗へ寄書きをしたり、千人針が廻ってきて祈りをこめた一針を縫いとどめたりした。連日片平丁のキャンパスは黒い学生服と角帽の群れで埋まり、講義のはじまった各教

室ともそうした学生達で溢れていた。死を覚悟して戦いに出ようとする者の、少しでも多く講義を聞いておきたい、学んでおきたいという切実な思いが静かに熱く感じられた。教授と学生とが心を１つにして学問に向かったこの時期のような大学の状況は前後に比を見ないことではなかったか。

間もなく、学生の大部分は潮が引くように大学から去って行った。片平キャンパスからも各教室からも男子学生が減ってみると、あとに少人数ながら女子学生の姿が目立つようになった。そんな時「いっそ東北帝国女子大学と看板を書き換えたらいい」と仏文の桑原武夫助教授が腹立たしげに言われるのを聞いた。ひどいと思うよりただ悲しかった。

18年度（10月から19年９月まで）の講義は残るもので続けられはしたものの、大学林の下刈り、工場での日帰り作業、農家の草取り、教練を兼ねた行軍等が断続的に入った。そして20年の正月明けから、私たち２年生は陸軍造兵廠仙台製造所への通年動員となり、毎日仙石線で苦竹に通う。女子学生は別れ別れに本部の事務的な仕事につく。私は会計掛調度課に配属となった。月に１回全工員たちへの掛をあげての給料を整え配る大仕事の他は、文書の清書や直属上官である中尉の命ずる手紙を書く位の楽な仕事といえた。他の部署の女子学生もそう忙しい仕事はなかったらしい。男子は主として工場に配属されて弾丸づくり。夜勤もあった。そのうち材料がなくなってくる。私たちも毎日防空壕掘りに精を出すようになった。

下宿にお風呂はなく市内の銭湯は殺人的な混みようで、その上ぬいだ衣服や履物を持ち去られる虞れがあった。その点帰りがけに入る造兵廠のお風呂は広々としてゆっくり出来ると楽しんだのも束の間、キヌジラミにとりつかれて往生した。衛生管理も儘ならぬ時代であった。

仙台も空襲は必至とは聞いていたが、私は油断していたようだ。東京からの疎開で来て私と同居していた妹に叩き起されたのは10日のまだ暗い時刻、南の廊下の雨戸を開けてみると、近くの育英中学校がすでに猛火に包まれていた。北西は陸軍衛戍病院に接している。危ないと思いあわてて裏の防空壕へまわってみると、すでに焼夷弾が落ち火を吹いていた。真っ青になって佇む下宿のおばさんに声をかけたまま、妹と逃げ出した。この夜の始終については別に書いているので省略する（『東北帝国大学女子学生の記録』、写真参照）。あとで知れば来襲の爆撃機B29は市の記録に120余機とある。夜空を埋めつくす米機から親子焼夷弾（途中でいくつもの小型に分かれ広がるもの）や爆弾が無数に落ちてくる。幾度かもう駄目と絶望しながら、近くの防火用水を思い切り冠って必死で北へ逃げた。ふりかえった仙台の街の炎々と燃え上がる光景と、翌日の焦土のすがたとを呆然と眺めていたが、それはつい昨日のようにも思われる。

下宿も焼けてしまい、あとかたもない。下宿のおばさんとその母親とは空襲の晩に別れたきりになってしまった。その後、風のうわさで故郷新潟へ帰ったと聞く。着ていたもののあちこちは火の粉で焼け穴ができていた。妹と見合わせた目はお互いに充血していた。辛くも命は助かったが、途方にくれた。北四番丁の岡崎義恵教授（国文学）のお宅へ廻ってみると焼あとに立ちのき先の立札があるのみ。又、苦竹動員隊長の中村吉治教授（日本経済史）の北五番丁のお家では避難先から戻った所といわれ朝食を振舞っていただいたが、これからどうしたらよいのか、ご相談するどころではなかった。住居は転々としたのち、清水小路の鈴木耳鼻科の空き病室をお借りできたことは幸いであった。それからは毎日単機のグラマン戦闘機に何度か襲われつつも徒歩で苦竹まで往復した。幸い昼食は変わりなく出された。また米どころ古川の女性が同じ課のよしみで、白米のおにぎりを沢山持ってきてくれたりして、その日その日を凌いでいた。

晩夏会（8人の会）編
平成10年8月15日発行（非売品）

2．敗戦より卒業まで

こうして8月15日を迎えた。造兵廠では職場ごとに職員も学生も一緒に正午のいわゆる玉音放送を聞いた。雑音で内容がはっきり聴取れなかったが、控室に引揚げた学生達は蒼い顔でうなだれるばかり。日本はとうとう敗けてしまった。それも無条件降伏ということなどがわかってくると、日本は、われわれは、どうなるのかといってみても誰もわかるものはいなかった。米軍に占領されたらどんなことになるか、女子は山中へ逃げた方がよいという者や、国際間の協定があるから、そんなことをしなくてもいいという者など、言い合ってみても空しかった。

戦争が終わった夜、はじめてそれまでの暗幕をはずし、久しぶりの明るい電灯をよろこび合った。空からくる敵機に知られないように燈火管制を徹底した夜の街は、手さぐり足さぐりで進まなければならなかったが、仙台は治安がよかった。工場から帰って夜9時まで開いてくれていた大学図書館に何度か通ったが、深閑と静まっている人通りの全くない街を通っても恐ろしい目に遭うことはなかった。勿論、空襲前のことである。

米軍の仙台進駐は9月16日夕刻であった。私はたまたま愛宕橋近くの路上にいた。完全武装兵士の乗ったジープやトラックの列が長々と続いて南の方から整然と進んでくる。轟々とした地響を立て、車の前後の灯りは眩いばかり、実に堂々とした進駐であった。この時私は日本の敗戦をまざまざと感じた。

進駐軍は一応軍律が保たれているようだったが、それでもややもするとトラブルが生じた。国語学の小林好日教授が銃をつきつけられて腕時計をとられた話、同期の壽岳章子さんが台の原でトラックに乗ってきた米兵に抱きつかれ、「プーア　ステューデント」と必死で言って難を逃れた話等々。その頃清水小路の鈴木医院から、土樋の宇野松仙画伯のお宅に移っていた私は、帰宅に一番近い南門の外には米兵の立哨所があって、退屈なのか妙なアクセントの日本語で呼び掛け追いかけてきそうだったので、そこは通らず、北門を出て電車に乗り大まわりして帰ったりした。卒業までの下宿は何とか確保した。大学の教職員、学生の多くが空襲の被害にあった上に、法文の木造校舎はすべて焼失し、残った階段教室は爆弾で屋根が破損、雨の日は傘が要る始末。それでも10月には新年度の講義をはじめることになった。被害を受けなかった研究室が教室代りとなった。秋深まるにつれて、出陣した学生で大学へ戻ってくるものが多くなった。なかには軍服の襟章や肩章をはずした丸腰の寒ざむとした姿の者も。片平丁のキャンパスはこうした学生たちで再び混雑してきた。焼けた学生控室の代りに図書館の閲覧室が人探しや、人と会う場となり、終日騒がしかった。研究室も講義が行われるので学生の行き場はここしかなかったのである。

衣食乏しく、暖房もまともでなかった仙台のこの冬ほど震え過ごしたことはない。大学当局も極力バックアップしてくれたが、何しろ大学自体甚大な被害のため、戦災学生への対処は思うようにいかなかった。そのとき戦災学生のために男子学生有志が救護組合を作り、連日身を粉にして必要な物資の調達に当っていた。それに加わり、いささかの手伝いをしたのも忘れがたい。丸善の知人から求めた原稿用紙は粗悪な品であったが、借りものの小さい机の上でともあれ卒業論文をまとめた。

21年9月26日の卒業式は、焼け残った小講堂で行われた。式のあと法文学部の卒業生は図書館の閲覧室に集まり、1杯のブドウ酒と梨1個と茹でたさつまいも1切れずつの祝宴となった。女子学生9名の晴衣は苦労の末の手製や人からの借着であった。その写真が今に残っている。この困難な3年間を助け合い支えあった、専攻を越えた熱い友情と共に。

昭和21年9月26日　東一番丁山上写真館にて

後列左より
壽岳章子（国語）、水野弥穂子（同）、小泉和（国文）
中島れい（国史）、藤田鈴恵（英文、17年入学）

前列左より
古田（原田）夏子（国文）、小池（渡辺）マサ子（哲学）
丸井（丸井）澄子（心理）、堀内（富田）志那子（哲学）

（東北大学史料館所蔵）

点描・百年史

花より花に蜜をすう

―― 東北大学勧学会成瀬寮始末記 ――

昭和31年文学部卒業（国語学）
遠藤　好英

1．成瀬寮の誕生

93歳の春に「27の若さで天寿の余生を生きたい」と書き、はやく学生にせめて思索の場を与えたいと書いておられた九嶋勝司先生が亡くなられた。昨年8月のこと。ご子息からの寒中見舞いで知った。先生は医学部産婦人科々長だった。昨年夏は、心理学の北村晴朗先生がご他界なされた。一昨年は、国語学の佐藤喜代治先生が亡くなられている。寮を支えて下さった3人の先生方は、もうこの世においでではなくなった。哀惜の思い切なるものがある。

九嶋、北村、佐藤そして樋口泉（教養部）の4先生は、旧制二高時代以来の仲間であった。この4人の先生方が成瀬寮をつくられた。昭和36年（1961）のことである。その開設までの経緯について、佐藤先生は次のように書かれている。

> 大学には学問があるかも知れないが、教育は無いのではないか―これが私の長い間の特に新制大学発足以来の疑問であった。教育は人格のふれあふところに行はれる。それぞれの研究室において研究の指導が行はれ、そこにそれぞれの教育が行はれてはゐる。しかし、大学において全体として教育の名に値するものが行はれてゐるかとなると、疑ひ無きを得ない。かういふ不満を充たさうとして、古い仲間と語り合ひ、寮の経営を思ひ立った。しかし、我々の弱い力では容易に実現しさうにもなかった。たまたま、成瀬先生の御好意によって、その希望が意外に早く実現することになった。我々は先生の御好意に感激し、十分な用意もないままに出発した（「この2年を顧みて」『成瀬寮寮報』創刊号、昭和38年12月20日）。

文中の成瀬先生とは工学部精密工学科の成瀬政男教授で、昭和36年3月停年退官し、4月に労働訓練大学校の校長に就任された。東京に転居されるに当たって先生は、宮町の東照宮に程近い私邸（敷地450坪、住宅約40坪）を学生寮として無償貸与されたのである。成瀬先生には、以前から寮への思い入れがおありだった。幼少の折、先生は毎日4里の山坂を上り下りして、自宅から中学に通いつづけていて「学校の近くにころあいの寮があってほしいという」「ほのかな願」を抱かれた。「その寮では、学問とともに、心もみがかれるものでありたい」（「寮の名まえ」『洗心』創刊号、昭和43年）、そんな願いも一緒だった。そして昭和14年東北大学に航空学科が創設され、その学生達から寮が欲しいと歎願され、ぜひ叶えてやりたいと、蓄えておいた印税を元手に「航空」と音が似た「宏富寮」を昭和16年に作られたのだった。当時学生課長だった金倉圓照教授の命名だという。

成瀬寮の門標のある門

4人の先生方は、発起人となって勧学会をつくり、東北大学学生の勉学並びに人間形成に資するため、学生寮の開設を決めた。

2．成瀬寮の発足と寮の生活

その時院生だった私は、佐藤先生から「寮長になって欲しい」と言われ、早速に寮母さんと寮生活を始めた。時に昭和36年４月６日。寮室には母屋の７部屋中、４部屋が当てられた。各部屋２人ずつ８人、その中、佐藤先生の紹介で４人が入ってきた。残る３人は、教養部に貼り出した「寮生募集」を見た18人の中から面接して決めた。寮生の構成は文学部３人、理学部１人、工学部４人となった。工学部学生の１人は、受験雑誌で３枚葉歯車の発明者と紹介されていた成瀬先生を慕って入ってきた。寮費は月6,000円だった。入寮の条件は特になかったが、勧学会の寮綱領は次の３項目だった。学生としての本分を守ること。共同生活を通じて友愛と自主性とを養うこと。人間形成に努めること。

寮には、玄関を入るとすぐ脇の壁に表裏色違いの名札があった。式台から畳に上がると、目の上に白居易の勧学文の額が掛けてあり、別の一室には朱熹の勧学文が掛けてあった。いずれも康峰という雅号の英文学科小林淳男教授の書であった。

寮母が居て３度の食事は出たが、小母さんの休みの日曜日は部屋ごとに２人で皆んなの分を用意した。この日は風呂も焚き、燃料は亜炭だった。

週末には談話会が持たれた。寮生が１人ずつ「鋼（はがね）はなぜ固いか」「ことばの歴史」「宗教と日本人」「磁気録音」「交通規則」などと、各自の好きなテーマで話をした。ときには先生方のお話に聞き入った。「応用心理学」は北村先生、「不換性歯車」という話は成瀬先生がして下さった。隔週にパリから届く“UNESCO FEATURES”を読むこともした。月単位では誕生会を催した。この時の飲み物には寮母さんに作ってもらった梅酒がよく出た。梅の実は、屋敷内にあった12本の梅の木から沢山取れた。邸内には大きな柿の木が２本あり、２年目の秋は大きな富山柿が鈴なりになって、皆んなで実の数当てをした。実数は646個。焼酎で渋抜きをして、干柿にもしたと思う。月例会は、時折、先生方のご招待でお宅を順に廻って開かれた。アメリカのディリングのハープのリサイタルに皆んなで行ったりもした。秋深まる頃には、皆んなで泉ヶ岳に登った。史跡めぐりのサイクリングにも出かけた。中田の熊野神社から名取は愛島（めでしま）の実方（さねかた）中将の墓や道祖神に詣で、雷神山古墳に立ち寄った後、相の釜の浜まで走って松林で料理を作って食べた。

このような行事は、文化部の企画があって行われたが、寮生は厚生、風紀、庶務、会計などのどれかの役を担当した。会計担当だった私は、寮生みんなが自転車を持つようになったのを見て、自転車置場を作ったりもした。

毎日の暮らしについて、勧学会から電気洗濯機が届けられ、理研光学からステレオが寄贈された。電気冷蔵庫も備わった。その度に喜んだが、テレビ・ステレオの寄贈については、話し合って求人とは無関係として受けることに決めた。話し合いは時に議論となり、議論となると場所はいつしか食堂だった。２、３人の興奮した声が食堂からよく聞こえた。折からの原水爆禁止運動で実験反対の声明を出すことについて皆で明け方まで激論を戦わせたこともあった。

談話室での誕生会（昭和36年10月29日）

3．寮、３年目の転機

昭和38年３月に、工学部の２人が新日鉄とシチズン時計に就職が決まって、卒業生送別会が催された。４月からは、代わって医学部、理学部、工学部から１人ずつ入寮した。年度初に桶口泉先生は静岡大学に移られている。５月には、文学部の助手になっていた私も、結婚して寮を出た。

その後も寮生は、談話会を持ち、月例会に歌を歌い、サイクリングに出かけたりして、それまでと同じ様な

寮生活を続けた。当初から書き継がれていた寮誌が、それを教えてくれる。毎日の見聞や出来事が、感想や批評込みで書かれているのである。議論しているものもある。大学ノートで10冊が残っている。

寮が発足して3年が過ぎた昭和38年12月には『寮報』が企画され、「成瀬寮3年の歩み」など回顧の文章を載せて刊行された。同時に『杜心』が発行された。これは表向きの『寮報』に対して普段着姿のお互いの心に触れ、「心のきずな」を持とうという思いから作られた。「19才になって」「ダンス雑感」「夢見しこと」「東照宮」「雪」など、身近な題で青春の思いが綴られている。その中に「国語の興亡」「一期一会」という佐藤・北村両先生の文章があり、「研究室紹介」の建築学科の「筧研究室」や「中国学合同研究室」などもある。

史跡めぐりへ、いざ出発（昭和36年10月22日）

4．成瀬寮の閉寮とその後

この『杜心』の第19号の標題の下に「さよなら成瀬寮」と見える。発行は1966年12月24日とある。昭和41年12月、成瀬先生が屋敷を売却されることになり閉寮となったのである。屋敷は、売られたあとも成瀬先生の思い通り、学生寮となった。洗心寮といい、毎朝、坐禅を組むことが入寮の条件だった。屋敷の新しい持主の小野寺信雄氏も、学生に対して並々ならぬご好意の持主だったのである。以上の事は、東北大学の片野達郎名誉教授が、本編纂室ニュース第11号に書いておられる。それによると、洗心寮は28年間続いたとある。成瀬寮は、その直前の5年9ヶ月と5分の1ほどの短い間の寮だったことになる。寮生だった学生は15人、技術者、研究者、医者、学僧、公務員などとなって全国に散った。半数ほどが大学など研究教育機関に就いた。そして皆がそれぞれ、個性を発揮しながら自己を実現しつつある。入寮順に、次の者達である。

遠藤好英（文・国語）、鳴海忠孝（工・精密）、村上保寿（文・倫理）、物井宏之（理・生物）、望月善文（工・精密）、鈴木淳之（工・電子）、原勢二郎（工・金属）、中嶋隆藏（文・中哲）、表佑太郎（工・建築）、小野木正夫（医）、木村武雄（理・物理）、松田佳丈（工・建築）、小林孝夫（法）、菊池武剋（文・心理）、橋本匡弘（理・物理）

閉寮20年後の昭和62年の秋、成瀬寮の集いが催され、皆んな、先生方も夫人同伴で集まった。

つい先日、刈谷から豊興（とよおき）工業株式会社顧問の鳴海兄が来仙した。社長職から解放されて、東北大の自動車クラブの集まりに出席した由。在仙の中嶋・菊池・遠藤の3人が彼を迎えて一緒に飲んだ。イギリス滞在4年の彼の体験談が刺激的で楽しかった。日本人が国際社会で雄飛するには、人に納得させる弁論を、と繰返していたのが印象に残った。

（追記）題の文句は旧制二高の校歌の2番第1小節である。蜂のいそしみ我が励みと続く。

成瀬寮の集い　於仙台共済会館（昭和62年10月31日）
前列中央が九嶋勝司先生、その右に北村晴朗先生御夫妻、左に佐藤喜代治先生御夫妻。

百年史編纂室日誌抄録

2005(平成17)年

10月

3日 安達宏昭助教授(文学研究科)通史2関係資料調査のため来室
12日 大島吉輝教授(薬学研究科)部局史3関係資料調査のため来室
19日 片野達郎名誉教授(旧教養部)ニュース原稿打ち合せのため来室
27日 安達宏昭助教授(文学研究科)通史2関係資料調査のため来室
28日 片野達郎名誉教授(旧教養部)ニュース原稿打ち合せのため来室
31日 百年史編纂室スタッフ会議開催

11月

11日 竹内峯名誉教授(理学研究科)調査のため来室
22日 越後成志教授(歯学研究科)通史2関係資料調査のため来室
28日 百年史編纂室スタッフ会議開催
30日 西山伸助教授(京都大学大学文書館)来室

12月

1日 大藤修教授(文学研究科)通史1関係資料調査のため来室
5日 百々幸雄教授(医学系研究科)通史1原稿提出のため来室
22日 百年史編纂室スタッフ会議開催
28日 大桃敏行教授(教育学研究科)通史1関係資料調査のため来室

2006(平成18)年

1月

13日 佐藤透助教授(国際文化研究科)通史2関係資料調査のため来室
19日 大桃敏行教授(教育学研究科)通史1関係資料調査のため来室

2月

3日 国分牧衛教授(農学研究科)部局史3打ち合せのため来室
6日 百年史編纂室スタッフ会議開催
21日 大藤修教授(文学研究科)通史1関係資料調査のため来室
22日 芳賀半次郎名誉教授(経済学研究科)来室

3月

2日 庄野安彦名誉教授(金属材料研究所)来室
入間田宣夫名誉教授(東北アジア研究センター)通史1関係資料調査のため来室
3日 佐藤勝則教授(文学研究科)通史2関係資料調査のため来室
7日 百年史編集委員会開催(事業報告・事業計画・予算案)
百年史編纂室スタッフ会議開催
31日 川岸久男室員(事務補佐員) 退職

4月

3日 佐藤勝則教授(文学研究科)通史2関係資料調査のため来室
10日 百年史編纂室スタッフ会議開催
大藤修教授(文学研究科)通史1関係資料調査のため来室
11日 佐藤勝則教授(文学研究科)通史2関係資料調査のため来室
17日 佐藤正博室員(事務補佐員) 採用
18日 部局史3編纂に関する反省会
20日 佐藤勝則教授(文学研究科)通史2関係資料調査のため来室

5月

1日 太田秀春室員(教育研究支援者) 採用
8日 佐藤勝則教授(文学研究科)通史2関係資料調査のため来室
9日 百年史編纂室スタッフ会議開催
10日 入間田宣夫名誉教授(東北アジア研究センター)通史1打ち合わせのため来室

編集後記

平成17年10月29日、文学研究科主催の阿部次郎記念館公開講演会があり、原田夏子氏による「戦中・戦後に女子学生として東北大学に学んで」と題する講演がおこなわれました。本講演を聴いた百年史関係者からその興味深い内容について伝え聞き、寄稿をお願いした次第です。

また前号で掲載した片野達郎名誉教授の「東北大学洗心寮」に関してはいくつかの反響がありました。なかでも、洗心寮の前身にあたる成瀬寮については、何らかの記録に残してほしいとの声が複数の関係者から寄せられたため、遠藤好英氏に寄稿をお願いした次第です。

なお、平成18年3月には、薬学研究科、工学研究科、農学研究科、情報科学研究科などを収録した『部局史三』が刊行されました。また、平成18年度には金属材料研究所などの附置研究所、東北アジア研究センターなどの学内共同教育研究施設等を収録した『部局史四』と開学から創立50周年までを叙述した『通史一』が刊行予定です。

東北大学百年史編纂室ニュース　第12号　発行日：2006年7月1日
編集・発行：東北大学百年史編纂室
〒980-8577　仙台市青葉区片平2-1-1
TEL 022-217-5042
FAX 022-217-4998
(FAX番号が変わりました)
URL：http://hensan.archives.tohoku.ac.jp/
E-mail：hyakunen@bureau.tohoku.ac.jp